

九、吉田さんと池田さん

1 大磯

池田さんは静養先の箱根への行き帰り、よく大磯に吉田元総理を訪ねることを楽しみにしておられた。

行き帰り枝折戸を見て思っかな　しばし相見ぬあるじいかにと
は天皇陛下の吉田さんを偲ばれた御感懐であるが、吉田さんは、大磯の海岸で悠悠自適の境涯にはいつておられる。

しかしこの閑居は、決してお粗末なものではない。北に小山を背負い、南は縹渺たる太平洋を抱えた豪壮な屋敷である。つい隣りまで故堤康次郎氏の所有地になってきたので、いつの日かこの屋敷も堤さんのものになりはしまいかと心配するむき（例えば高崎達之助氏）もあつたようであるが、逆に吉田さんは、その堤さん所有にかかる五賢堂さえも移転費付きでもらいうけ、自分

の屋敷に移してしまわれた。五賢堂というのは維新の元勳伊藤博文、木戸孝允、岩倉具視、三条実美、西園寺公望の五賢人を祭った小宇である。

わが国には海外から多くの賓客が訪れる。そしてその数は年を追って多くなってくる傾向が見られる。吉田さんは、その方々を必ずといっていいくらいにこのお屋敷に招待される。米国はもとより英独仏さらには中国といった具合に、吉田さんの客となられた要人は多い。吉田さんの客に対する応待ぶりは、その人柄が偲ばれて、全くユニークなものがある。天衣無縫というか慇懃無礼というか、聞く人を啞然たらしめるに足るものであるが、聞く人にとって一種の快い響きをもっている。この人の毒舌を楽しむ人も多い。これは、相対の世界から超絶した高い立場に立つ吉田さんによつてはじめて可能なことであるといえよう。

2 吉田さんの魅力

総理その他の要人の大磯訪問ということになると、世間では、それが何か政局に特別の影響や意味をもっているかのように取沙汰されるのが通例である。吉田さんという方は、政局を担当されていようがまいが、代議士というバッジをつけられていようがまいが、絶えずそのように

問題になる人である。しかし私は、それら要人の大磯訪問を格別に意味があるものとは思っていない。恐らく訪問を受けられる吉田さん御自身も、何とも思われていないのではないかと思う。池田さんの大磯訪問も、先輩であり恩人である吉田さんに対する礼儀ということが先に立ち、吉田さんとのたわいもない会話にじみ出る人間的魅力にひきつけられてのことであつたと私は思われる。何となれば、池田さんは吉田さんを師表と仰ぎ、かけがえのない恩人として敬慕しておられるが、同時に、吉田さんが現実の政局の裸面においてこられることを好まれず、またそういうことのないように終始こまかく配慮されておつたからである。

そのように吉田さんを迎えられることが、吉田さんを敬慕する後輩としての礼儀であり、日本の政治から院政的臭味をとり除く道であると池田さんは考えておられたようだ。日本の政界で吉田さんほど高い水位に位しておられる人はなく、国民の心の奥に吉田さんほど深い敬意と信頼をかち得ている人はない。それだけにこの偉人が超然たる絶対の立場におられることが、日本の政界全体のために必要なことだと池田さんは心得ておられたようだ。現実の政局の平面に吉田さんがおられてこられるとなると、吉田さんは、否応なしに派閥という相對の世界に何等かの立場をとられるものと見られる破目になられる。それはよいことではない。代議士を引退されて、非公式ながら、官中のことについてだけ、御相談にのつていただきたいと吉田さんに懇請されたのも、他

ならぬ池田さんであった。

ところがこの池田さんの微衷を、当の吉田さんがどのように受けられているか、それは私にもよく判らない。なるほど吉田さんは池田さんの懇請を容れて、昭和三十八年の総選挙には立候補を断念された。また私などがお訪ねしても、現実の外交政策や外務省の人事に対し、自らの注文を出されるようなことは一切されなくなった。私なども冗談まじりに「あまり長居すると外務省の人事などについて脚注文がでると困りますから、この辺でお暇乞いをすることにいたします」と申上げると、吉田さんは何々大笑されるのが常であった。吉田さんはよほど自制されているにちがいないと思われる。

しかしそれでは吉田さんは一切の俗事に超然としておられるかという点、必ずしもそうではない。天下の大事についてはもとよりであるが、友人知己から頼まれた些事についても、それを机の引出しにしまっておかれるようなことはなされない。自ら筆を執られて、池田さんははじめ要路の人々には、自分の所見や希望をよく書いてよこされたばかりでなく、自ら電話機をとって電話されることもまれではなかった。池田さんは「オジイサンからこういう書翰がとどいたよ」とか「オジイサンはこついわれておるよ」ということをよく洩らされたものである。池田さんによこされた吉田書翰は、大きいトランクの空間を満たすほどになっておるにちがいない。一体このこ

とはどう解釈すべきものであろうか。

吉田さんという人は、義理と友情に篤い方である。かつて自分が指導を受け恩義をこうむった先輩や友人に対してはもとより、その子女や孫のことまでも、常に案じておられる恩誼に篤い人である。また人から依頼されたことについては、細大となく、然るべき処理をされないと気がすまない律義な人でもある。そしてその心情が特定のことと触発されては書翰ともなり、電話ともなってくると思われぬ。それを受けた相手方がどのように受取るか、というような配慮や遠慮はされない。相手もまた自分と同様に恩に感じ義に篤い人として考えられておられるにちがいない。相手もまた自分と同様に、ハッキリと物事を割り切つて、是は是、否は否、好は好、嫌は嫌であると思つておられるのであろう。清明をもつて心を支え、淡々をもつて情を抑え、勇断をもつて事に処す方である。「こういう事をいっては池田君が迷惑がるにちがいない」などという心遣いは、自分の第一義とする義と理の前には別して気にかけておられない方ではあるまいか。

ただ、池田さんはさきに述べたような配慮から、自分で進んで現実の政局の問題を吉田さんにもちかけるようなことのないよう終始心掛けておられたことは間違いない。また世にいう大磯会谈というものが、政局問題にふれたこみ入ったものであつたという評価も成りたたないと私は判断してゐる。

吉田茂という大器を論評することがここにおける私の主題でもないし、私はその任でもない。ただ吉田、池田両氏の交渉というものを最近の政局問題に限ってみれば、私はこのように理解しておるといふことだけを述べるに止めておきたい。吉田茂の人物と業績を探究することは、日本の近代政治史にとつての大きい課題であるからだ。